

● 13日炭窯開けの結果 原木にまで着火できず 20日午前8時に再度着火を試みます

先週の最大の関心事は、なんといってもみんなで力を合わせてきた炭焼きの結果でありました。焚口や取り出し口を開いてみましたら、窯の中に詰め込んだ原木が炭化せず、もちろん着火せず詰め込んだままの切り口で現れました。着火の失敗でした。事務局会議でその原因を検討しましたところ、初めの焚き付け時間は相当長く、火力も強力に燃やし続けた。窯の温度も50度を超える程にあがった。しかし排煙の色は白色から変化はしなかった。もちろん木酢液は1滴も搾取できなったと報告がありました。また排煙の変化が（黒色）認められないにもかかわらず、白色の時に空気の調整穴に変更したこと。その後窯の温度が時間の経過とともに低下した。となっています。この現象から原因を推察し、再度の着火にこの経験を生かしたいと思います。



再着火は20日午前8時に行い、少なくとも12時間は焚口から燃やし続けてみることにしました。もちろん窯の温度測定装置（寒暖計など）もできれば増やして管理体制を強化して挑みたいとしています。どなたでもこの方針でチャレンジしますので興味ある方のご参加を大歓迎します。気楽にお立ち寄りください。できるならば夜通しの窯番になるかもしれません

● 13日午後1時30分イタセンパラの復元目指す対策会議開催 10名が参集

早くからこの日を決定しておりましたが具体的に準備を進めることができませんでした。特に地元井手町の方々へのご案内が遅れてしまいました。それでも10名の皆さんの出席があり、トヨタ自動車に助成金申請を行っていただいた太田さんからイタセンパラの生態などについてのスライド説明がされ、イタセンパラについて理解が深まりました。続いてレジメと解説の説明やこの一年の取組経過のお話のあと質疑応答に移り出席者各位から発言が相次ぎました。井手町の特異な姿勢を突破するには、地元の団体との連携を前面に取り組むべきとの発言がありました。井手町ではゲンジボタルの普及に成功しているとかカジカガエルの取組に関心があるといった発表がありました。広く広めるには大きな取組が必要だと強調され、「さかなクン」などに来てもらってはどうかと提案があり、盛り上がりました。

**● ヤマトサンショウウオの卵嚢 28対に増加 調査開始以来最高の産卵を確認**

先週に卵嚢の数が最高になりましたとお伝えしましたが、その後上池と下池それぞれに1対ずつ新しい卵嚢が発見されました。合計28対になったので産卵したメスは合計、28匹は棲息していることになります。これまではかなり少ない命のつながりであると判断していましたが、昨年は9対だったのですが今年はすごい数が数えられました。これは二つの池での出来事なので周辺一帯の池で起きていれば本当にすごいことですが、私たちの力量ではこのあたりが限度のようです。これまでにない数の卵嚢があることは、産卵する場所がここしかなかったことになって厳しい環境であることを証明することにもなります。

● 次年度の活動計画に新提案を求めています。

3月も中頃を過ぎました。年度の最後にまとめや新しい方針を決定しなければならない時期になっています。里山の会では理事長や常務理事をはじめ高齢化が進み、脳梗塞の発生などによって活動に大きなハンデが発生しました。しかし理事諸氏をはじめ社員の方々のご奮闘で乗り越えられました。新しい年度はどう展開していけばいいのか大いに工夫が必要です。会員社員の皆様からの新鮮な提案があればお願いいたします。ハンデを背負っての新年度になれば相当苦しい取組になること必定です。積極的なご提案を待っています。

● 里山の会の施設へのアクセス図作成者を求めています

先日炭焼き釜の窯開きに、京都市内から雨の中事務所をたずねてこられて、ルートを教えていただきたいとのことでした。メモを書いて案内したのだけれど、結局到着されなかったようです。わかりやすいガイドブックがあればとつくづく思いました。結成25年も経過しているのに、こうした準備ができていないことを恥ずかしく思いました。今の時代は携帯するスマートホンがあるじゃないかといった折ですが、準備できていないことを恥ずかしく思った次第です。どなたかこうしたマップを製作していただけないでしょうか。ご協力をお願いいたします。

● 新年度の活動について定番活動をさらに充実した内容に工夫やアイデアを出してください

今、自然や屋外での取組（イベント）がコロナウイルスの関係で大変困難になっています。里山の会ではスタッフの多くが高齢者となり活動継続が大きな心配事で、例年繰り返しの取組となり新鮮さに欠け、楽しさや面白さなどが欠けているように見えています。きっとこうすればいいのにとかこのように改善すればと感じておられると思います。25年間やってきたのだから一定の成果は認められますが、未来や次の時代を考えたときにこれでは不十分だと思いますので、積極的なご提案を強く期待しておりますし、世話役として名乗っていただきたいと思っています。

● 会誌50号への寄稿を待っています

新年度は結成25年を迎えることになります。そして会誌50号の発行となってきました。創刊号の折2〜3号で腰が折れるだろうと予想されていたことでしたが、200人を超える会員の温かい応援によって誰もが予想できなかった50号の連続発行「里山の自然」に到達してきたのです。この記念すべき会誌にこぞってご登場いただきたいものです。目も見えなくなってきた、読むのがつらい、文字を書くことなどとても、マイナスイメージが重なって大変だろうと思います。しかしここまで何とか継続してきた記念号なので関わってくださった皆様が奮発して、ハンデを乗り越えてご協力をお願いいたします。また元気な若い皆様もこの記念するチャンスに子育てやコロナ対策や身の回りの出来事、お感じになっていることをひとことお願いします。

メールでの送付大歓迎です。はがき手紙でももちろん結構です。締め切りは4月20日でお願いします。

● 竹蛇籠への工夫 シリーズ4回目

木津川の魚を増やすには産卵場所の増設、三面側溝問題などに付いていろいろ学ぶ機会が増えた。河床低下問題にも及び、竹蛇籠の設置に話がおよんだ。仲間ともずいぶん魚が少なくなっていることが話題になっていた。

木津川の土砂問題・河床低下問題などについてあらゆる機会を通じて話題にしてきた。淀川河川事務所から土砂部会の委員の一人にとお誘いを受けた。委員会では専門用語が飛び交い理解に苦しむことが多かった。しかし魚を増やしたい、子どもたちに豊かな川を体験させてやりたい気持ちから竹蛇籠の設置を提案した。川に建造物の持ち込みは一木一草たりとも出来ない聞き及んでいた。しかし竹は木津川にある、石も木津川の石が積み上げられている、持ち込むものは流れ止めの杭程度だと木津川出張所に説明して、了解をしていただいた。